

佐伯泰英著「惜櫟荘だより」（岩波書店、二〇一二年六月）

「惜櫟荘」は熱海市伊豆山にある別荘の名前。

施主は岩波書店創始者の岩波茂雄、設計を依頼されたのは吉田五十八（よしだいそや、昭和四十九年没）、近代的数寄屋建築の名手であり、手掛けた建物は、吉田茂邸、岸信介邸、川合玉堂記念館、小林古径邸・画室、梅原龍三郎邸、旧歌舞伎座、外務省飯倉公館・別館、等々、昭和三十九年文化勲章受賞者である。

著者は、NHKの時代劇で取り上げられた「居眠り磐音江戸双紙」の作者で人気時代小説作家のひとりである。施主岩波の交際の広さから多くの著名人が宿とし眼下に広がる景観を取り込んだ「惜櫟荘」を愉しみかつ感銘を受け宿帳に名を残している。

施主の岩波は七つの注文（課題）を吉田に与え、これに応えた作品が「惜櫟荘」である。設計図面はないとのこと。「惜櫟荘」を入手し番人と自称する佐伯は「解体修理・復元」を決断した。本書は、「惜櫟荘」にまつわる話、入手までの経緯、解体修理の過程や佐伯に影響を与えた人々にも話が及んでいる。私が毎週楽しみにしていた、NHKで放送されていた「週刊ブックレビュー」の司会者で多読家の児玉清との話も大変興味深い。作家からみた単行本と文庫本の違いについての考えも面白かった。本書のあとがきを以下に示す。

あとがき

熱海の住人になって十年、偶然がきっかけで岩波別荘惜櫟荘の番人に就いて四年余、この短い歳月が熱海を取り巻く環境を変えた。

戦前に開発された別荘地だった石畳と私一家が縁を持ったときには、この界隈には未だ「戦後」の名残りが感じられた。昭和三十年代の熱海好景気を知る人々が住んでいた。また同時に彼らは、その後の客離れと熱海不況を体験してきた住人でもあり、その落差のある思い出話なんとも懐かしく切なく面白かった。

そんな低迷しつつもどことなく緊張感を欠いた熱海を不運が見舞った。バブルがはじけた後遺症がこの石畳別荘地に変化をもたらしたのだ。

住人たちが高齢化してきたことも相俟って、海軍さん、隣家某寺の管理人夫婦と、一人ふたり私たちの周りから消えていった。

そんな最中に惜櫟荘の番人に就くことになったのだ。生来のせっかちと向こう見ずが突っ走らせたか、建築から七十年を経ていた惜櫟荘の完全修復を思い立った。

このささやかな物語に書いたように、惜櫟荘の主人は岩波茂雄であり、設計者は近代数寄屋の提唱者吉田五十八だ。独創の出版人と江戸の粋を知る建築家のぶつかり合いが残した小さな建物がそうさせたというほかない。

とはいえ私が惜櫟荘の来歴を承知していたかといえば、全く無知であったと告白するしかない。この地に住むようになって、門を閉ざす惜櫟荘のことが気にかかり、庭師が入った日に頼んで見せてもらった。

その瞬間、日本建築に造詣もない私が、この古びた家の意味と環境を直観的に理解した。惜櫟荘に関わりを持った尾崎行雄や幸田露伴、志賀直哉をはじめとする政治家文人学者たちの溜め息や呼吸が壁や柱に染み付いて、私になにかを喚起させたのだろう。

私が番人に就いた経緯いきまつと以後のことは『惜櫟荘だより』を読んでもらうしかないが、建築して七十年を経て傷んだ建物の修復へとまっしぐらに走り出した。大変慌ただしくも激動混乱の四年であったが(家人の苦勞は別にして)、私自身は大変貴重かつ楽しい時を過ごさせてもらった。

「月刊佐伯」と揶揄される文庫書下ろし時代小説作家の暮らしは、益暮れもなく決まった分量を書き続けることだ。そんな暮らしの合間にのぞく普請場の職人たちの技と仕事ぶりを楽しんで英気をもらい、またわが仕事場に戻っていく日々であった。

譲渡をうけてから三年半後には新築扱いの修復が終わっていた。

本文中にも書いたが、この建物と環境をどう保存していくか、わが一家に命題が残された。登録有形文化財、NPO、ナショナル・トラストと、あれこれない知恵を家人らと絞っているが、どれも一長一短あり、差し当たって私が存命の間は惜櫟荘を利用しつつ守っていくしかないかと思っている。

文庫書下ろしという出版形態は、十数年前まで存在しなかった。文芸書籍が売れ難くなった昨今、中堅の出版社が一発勝負の文庫書下ろしを手掛け、私など売れない作家がこの戦線で生き残りを図ったのが始まりだ。

いつの頃からか、時代小説文庫書下ろしの牽引車のように評されるようになり、当人は内心忸怩たる思いがなかったわけではない。老舗出版社などは絶対手を出さない「際物出版」だったからだ。

十数年倦まず弛まず書き続けてきた結果、百八十余冊の文庫と累計四千万部という夢のよう

な数字を得た。これが惜樸荘買い取りと修復の原資になった。

本文中に記したように惜樸荘は、岩波文庫によって建てられたと聞く。それを時代小説文庫書下ろしが受け継いだと考えれば、まるで「縁」がなかったわけではあるまい。

それはさておき『図書』に連載した「惜樸荘だより」が岩波書店からなんとハードカバーで出版されることになった。二年間二十四回分に加筆して、写真を加えることにした。ついでに報告すれば、『図書』の連載は「惜樸荘の四季」として続くそう。改めて気を引き締め直し、徒然なるままに「惜樸荘だより」で書き残したことや惜樸荘の変化を報告していきたい。

付記すれば、惜樸荘をこれからも支えるであろう海側の土地の整備も始まり、伊豆山十二号泉は替掘り(老朽化した源泉に替わり新たな源泉掘削)作業という大事業が待ち受けている。狭い一角だが、なにかと動きはありそうだ。

最後になりましたが、惜樸荘修復にあたり、建築家の板垣元彬氏、水澤工務店、大工棟梁川本昭男氏を始め職人衆、浅慮な番人にあれこれと配慮して下さった岩波家の方々に感謝申し上げます。また本書出版に際し、口絵写真を快く提供してくれた写真家の荒牧万佐行氏、言美歩氏に深く感謝を申し上げます。本文中、クレジットのない写真は私自身か娘の朝彩子の撮影したものである。

最後に岩波書店社長の山口昭男氏、『図書』担当富田武子さん、書籍担当中嶋裕子さんのご高配とご協力にお礼を述べたい。

二〇二二年四月吉日

佐伯泰英